

## 上社会の成り立ちと継続性についての一考察

成瀬美幸

「わが青春の上社会—昭和を生きた洋画家たち」（以下、わが青春の上社会展）は、神戸市立小磯記念美術館（2020年10月3日-12月13日）と豊田市美術館（2021年1月5日-3月14日）の2館で企画・開催した展覧会である。

わが青春の上社会展で取り上げた「上社会」とは、1927（昭和2）年3月の東京美術学校西洋画科卒業生たちの同窓会である（図1）（厳密には全員が同時期に卒業したわけではないのだが、詳しくは後述する）。東京だけでなく北は北海道から、南は鹿児島まで、全国各地から同校に集まり奇しくも同級生となった彼らは、同窓会に「上社会」と名付け親睦を深めただけでなく、卒業した半年後の9月には第1回の展覧会を自分たちで開催した。以後もほぼ毎年展覧会を開催し、美術雑誌が毎回記事を掲載するほど注目される。終戦後しばらくの中断を経て、50周年展開催を機に再び毎年展覧会を開くようになり、1994年に最終回を迎えるまで続けた。東京美術学校の卒業生のなかで、展覧会を開催する同窓会はいくつも存在するが、上社会ほど長く続けた団体は他にない。

加えて、上社会の会員たちは卒業した時から実力者揃いと注目されていた。のちに文化勲章を受章した牛島憲之、荻須高德、小磯良平をはじめ、猪熊弦一郎や岡田謙三、中西利雄、山口長男等々、全国的に知られる彼らは皆上社会の会員であり、東京美術学校時代の同級生であった。ここで挙げた画家だけでも作風や主義は異なる。個性豊かな彼らが、上社会という場では結束していたのである。なぜ上社会は、半世紀以上も展覧会を続けられるほどのつながりを保つことができたのか。本稿ではその理由を少し掘り下げてみたい。

まず会員の年齢構成を確認しよう。

彼らの多くは、1922（大正11）年に東京美術学校西洋画科に入学した者たちである。ただし台湾や中国、朝鮮からの留学生や中途入学者はこの限りではない。結成当時の会員数は44人。生年ごとの人数は次のとおりである。早生まれの者は、旧制中学の卒業年度が一年早いため、同じ生年でも一律同学年とは言えないものの、生年月日が判明した会員<sup>1</sup>は絞られるため、この分類は一つの目安である。

1899年生まれ	2人（うち留学生1人）
1900年生まれ	8人
1901年生まれ	4人（うち留学生1人）
1902年生まれ	15人（うち留学生1人）
1903年生まれ	8人（うち留学生1人）
1904年生まれ	4人（うち留学生1人）
生年不明	3人 <sup>2</sup>

彼らの生年は、1899年生まれから1904年生まれまで、留学生5人もこの範囲におさ



図1  
1927（昭和2）年東京美術学校西洋画科卒業写真

まっている。同級生でも最大5歳の年の差があったことになる。

当時の東京美術学校西洋画科の受験科目は石膏デッサンだったが、全国の学校にデッサン用の石膏像も、デッサンを指導できる教員もまだ十分ではなかったこの時代、東京美術学校西洋画科を志す大方の学生は、旧制中学を卒業後、東京の川端画学校、葵橋洋画研究所、本郷洋画研究所のいずれかに在籍し、デッサンの基礎を学んでから受験した。まれに中学時代からすでに油絵具を扱っていた小磯良平のような者もいるが、研究所でデッサン用の木炭とパンの使い方を覚えるところから始めた初心者も多かった。東京美術学校に入学できるレベルまでデッサン力を身につける時間に個人差が生じるのは仕方ないことであった。

生年別にみると一番多いのは1902年生まれで会員の3分の1を占めている。中学卒業後、上京のタイミングに違いがあるものの、1、2年研究所で学んでから入学した者たちで、猪熊弦一郎、岡田謙三、山口長男らがいる。比べて一つ年上の1901年生まれは4人と少ない。その理由として、彼らは入学した前年に満20歳を迎えていること、すなわち当時男子に義務付けられていた徴兵検査を受ける年齢だったことが考えられる。東京美術学校の学生となれば25歳まで徴集延期となるが、不合格となったことで前年に受験に区切りをつけた者も多かったのではないか。

中学を卒業して、今でいう現役合格が可能な1904年生まれも4人いるが、このなかには2月の早生まれの大月源二もいる。彼を除けば現役合格者は、7月生まれと判明している石井清夫など多くても3人しかいなかったことになる。当時画家を目指す若者たちにとって東京美術学校西洋画科は、旧制中学の美術教育や在学中に地方の画塾で身につけられる程度の画力ではほぼ太刀打ちできないうえ、受験勉強に時間も経費もかかる難関だったのである。

年長者の1899年生まれ、1900年生まれは計10人。牛島憲之のように東京美術学校の受験を3回失敗して入学した者が含まれる。他にも、最初は船乗りを目指し入学した商船学校を中退してきた高野三三男や、旧制高校を志望しながら浪人中に川端画学校に通った1899年生まれの最年長藤岡一など、進路変更したため入学まで時間がかかった者もいた。少なくともこの三人は実家が裕福な資産家や実業家であることがわかっており、彼らが何年もかけて東京美術学校に入学できた背景には、十分な経済的支援があったことも理由にあるだろう。一方で、師範学校卒業後に教職義務を終えてから念願の東京美術学校に入学した杉浦俊雄や、東京美術学校に入学したものの校風に反発して一度中退し、小学校に勤めたのち再入学した加山四郎など、いわゆる苦労人や変わり種もいるのがこの年代である。1902年生まれの小堀四郎は回想文のなかで、学生時代の数々の悪ふざけを述べたあと「このような茶目気は、矢張り年輩組は参加しなかった」<sup>3</sup>と語り、同級生の中でも年少組から見れば「年輩組」は十分大人びた存在だったようだ。

東京美術学校に入学した年の1922年には18歳から23歳であった彼らだが、入学間

もない頃の同級生たちの様子については、上社会を結成して約50年後に書かれた荻野暎彦の回想文に詳しい。

…四十人程の新生者が、随分デッサンの上手な者、それ程でもない者、毎日同じ石膏像を午前中じっと見つめることになった。何せ始めから終わりまで描いているデッサンはお互いに見合うのだからどうしても上手に描く者に対して畏敬の念が生じる。

そして又そういう者は自然立振舞言葉使いまで兄貴じみ、時には親分ぶったりする。入学してそんなデッサンに精を出しているある時、お互い親睦を深める目的で駄菓子を食べ粗茶をすすって歓談しようと提案する兄貴がいて、皆異存もなく教室の中で車座になってはじめた。(中略) 又その後親分が皆に提案した。「授業料が増額になるから反対して値上げ阻止をしよう。」又皆が賛成する。(中略) 民主的な手段で、即ちその提案した親分を万場一致で推選し、この代表をその衝に当たらせることにした。親分は衆望を担って学生課に乗り込んで、勇ましく鈴木先生に値上げ反対を申し込んだ。ところが逆に「君達は文部省から一人につきこれこれの額の教育費をもらっているのだ」と細目にわたって説明され、行きの威勢はどこへやらしょんぼり戻って来て皆に事の一部始終を説明した。勿論吾々とても返す言葉もなく、ましてゲバの起りようもなかった。まあいろいろな機会や状況で兄貴や親分が骨折りをいとわず、吾々もその親切に無言で感謝するようになり、いつとはなしに親睦を深めていった<sup>4</sup>。

荻野暎彦は1902年生まれ。「兄貴」「親分」が、荻野が本文でのみ使用した呼称だとしても、1年の時から頼りになる同級生がいたことは確かなようだ。

先ほど小堀が回想で「年輩組」といった彼らが、荻野のいう「兄貴」「親分」かと一見思えるが、必ずしもそうではないだろう。というのも、例えば牛島憲之は、在学中は校外で制作したり、舞踊や常磐津を習ったりしてあまり登校しなかったことは知られており<sup>5</sup>、杉浦俊雄は家庭教師や少女雑誌の挿絵を描くアルバイトで稼いだお金で、学費だけでなく故郷から呼び寄せた妹に稽古事もさせていた<sup>6</sup>というから、公私ともに多忙で同級生の取りまとめをする余裕はなかったと思われる。他の資料でも、いわゆる親分肌の人物は浮かび上がらず、学生時代に同級生のために尽力したのは自分だとわざわざ名乗る者もない。荻野も「兄貴」「親分」と繰り返しているものの、誰のことを指しているのか、本文中で明らかにしていない。

「兄貴」「親分」については後ほど考えるとして、次に上社会結成の動きを見てみよう。

1930年2月に開催した上社会第3回展の前後で刊行された『上社会会報』の、創刊号と2号だけが見つかっている。どちらもガリ版刷りで、2号には印刷から製本まで会

員が分担して行った創刊号を、第3回展の会場で配布した様子が書かれている<sup>7</sup>。『上社会会報』創刊号と2号の主な文章は、わが青春の上社会展図録に再録しているが、創刊号で森寅雄が「会報発刊に際して」の中で記述した上社会結成の様子を改めて抜粋してみる。

…雲り勝ちのどんよりした天気の日で寒さもずみ分と激しかったので誰かの提案のもとに買ひ集められた巴焼をほほばりながらあらかじめ数名のもので下ごしらへをした規約について議論した。大分議論も出たが結局親睦を計ることに異議あるものがないのは当然であり、それに我我美術によつて立たうとするものがしつかりした一つの団体をもち展覧会をもつといふ事に異論のあるべき筈はない。規約の一二に議論はあつても兎に角円満な決議を得て、こゝに上社会は結成を急いだ。

会名の件は其後会員持ち寄りの名案を投票により遂に荻野案に一決した。

そも上社会は規約第一條<sup>7</sup>の示す如く美校昭和二年度西洋画科卒業生及其の關係者である。かねて御指導を得てゐる岡田、和田、藤島、長原、小林の諸先生方<sup>8</sup>に大体の意見を纏めて御相談に上つた所、大いに御賛成を得て快く一肩入れて下さることを承諾され、顧問として会の指導をして下さることに決議した。(中略)かくして大正十五年二月六日を創立記念日とし、山口長男君及不肖私が第一回の世話役として仕事にとりかゝつた<sup>9</sup>。

もうひとつ、先ほど引用した荻野暎彦の回想文の続きにも、卒業前の上社会結成までの経緯が当時の心情とともに書かれている。

教室は三つに分れても矢張り今迄の兄貴や親分を中心に皆は機会さえあれば連絡し行動した。教室が分れ指導教官が違うから吾々もその影響看過を受けて少しずつ画風が違ってくるのだが、又交友関係も先輩や後輩を交えた入学当時の単純さからもっと複雑になって来ているにもかかわらず「初心忘るべからず」とでもいうのか。やがて卒業期へ近づいて行く。

(中略)閑談の中でやがて吾々もここを卒業する。そうしたら皆別れ別れに或は遠い所に行ったり、或は音信も絶えてしまふだろう。同級会を作るうではないか、そして出来れば毎年展覧会を開催してお互いの作品を一堂に並べて親睦と研究に役立てようではないか、今迄各自の作品を教室の中で皆に見せていたし、又各自が教室の他の連中の作品を見てお互い文字通り切磋琢磨したように卒業後もこの気持をつづけようではないか、とこの草上の閑談が少しづつ具体的になり、それでは誰が幹事になるのか、事務担当者や事務所はどうするか等々。そんな時になると入学一年の時の兄貴や親分が皆より一年も二年もませた考えを出して、計画を上手にまとめて行った。

そしてついに形は出来上がったから会の名称は何とするかが相談の結末になった。ところが名称が衆智を集めても定まらず、すったもんだの末に、一人が怖る怖る申し出た。「上社会」と。心は上野の杜の会。不満な人もあったが、他に感心するような名前もないので、仕方ないそれに定めるか、ということで昭和二年東京美術学校西洋画科卒業生全員による親睦、並びに美術研究の機関或は団体として催し、会の運営は全員の意思を代表する世話役により費用は全員分担、会則を定め発足することになった。会員の中には卒業前に海外へ出た者や、或は病気その他で卒業が少し遅れたものもあったが、会としては一緒に入学した者全員を会員とすることになった<sup>10</sup>。

二人の文章で確認できるのは、次の点である。

- ・上社会は親睦を目的としながらも美術団体として結成し、規約を作成したこと。
- ・会員は1927（昭和2年）の西洋画科卒業生及び、1922年にともに入学した中途退学者、留年生としたこと。
- ・西洋画科教授5人全員に顧問を依頼したこと。
- ・世話役をたて、事務局を設け、会費を会員全員で分担したこと。
- ・1926（大正15）年2月に創立したこと。

森寅雄と荻野の内容で大きく異なるのが「上社会」と名付けた経緯についてである。森寅雄は荻野の提案によるものであることや会員の投票で採用されたことを明らかにしている。卒業して3年後の、他の会員も編集に携わっている会報の掲載文なので間違いである可能性は低だろう。対して命名した本人であるはずの荻野は照れもあるのか、結成して50年も経っているのにその時の様子を詳細に書き、その割にはぐらかしている節がある。

規約についても掘り下げてみたい。ここに会員となる条件を明記したのは、同級生といっても一樣ではないからだろう。この規約に依って、上社会結成の時点ですでに中途退学していた高野三三男や岡田謙三や、留年していた猪熊弦一郎なども会員となったことがわかる。

また、指導教授に顧問を依頼したのは、彼ら自身が画家としても展覧会を開催するにしても、不慣れな新人であると素直に認めているからであり、一方で洋画壇の重鎮でもある教授の後ろ盾がこの団体にとっては有意義であると自覚していることが垣間見える。

会費を全員で分担というのは、至極当然のように思えるが、実は上社会が結成された1926年というのは、前年の1925年に25歳以上の全ての男性が選挙権を与えられ、平等に対する意識が一般市民にも広がっていた時期と重なる。上社会でもまた、納税額に差があるのが親が資産家であろうが会費を一律としたことで、発言にも差が生じないようにしたとも考えられる。

森寅雄と荻野の文章を辿ると規約を定めていく様子が興味深い。森「あらかじめ数

名のもので下ごしらへをした規約について議論した」、荻野「入学一年の時の兄貴や親分が皆より一年も二年もませた考えを出して、計画を上手にまとめて行った」。つまり、数名で作った叩き台をもとに、会員で意見を出し合い、協議の末決まったのが上社会の規約ということだろう。全員が違和感のない内容になるまで、細部まで根気よく仕上げられていったことは想像に難くない。

こうしてみると、荻野のいう「兄貴」や「親分」は、どうやら求心的な人物でも、強く意見を押しつける者でもなく、皆が納得のいくかたちに丁寧に意見を集約できる者たちだったとみえる。だからこそ、具体的な人物の名前を挙げる必要もなかったのではないか。

とはいえ森寅雄の熱のこもった文のあとに、相変わらず「兄貴」「親分」を連発している荻野の文章を読むと、まるで森寅雄が当の「兄貴」「親分」のように見えてくる。森寅雄は荻野と同じ1902年生まれであった。彼曰く「第1回の世話役」を担ったといい、世話役は交代で担当することとなっていたとも読み取れるが、森寅雄は少なくとも第3回展までは引き受けた上、他の同級生の回想文などから察するに卒業後、上社会の運営に最も尽力した一人であったようだ。だからと言って荻野の言う「兄貴」「親分」の一人を森寅雄、と断定するのは今更無粋、としておこう。

残念ながら上社会規約の全文はいまだに見つかっていない。しかし上社会が長く結束力を保てたのも最初にしっかりとした規約をつくったからこそ、であれば、規約がいまだに見つからないのがつくづく残念である。

上社会規約は見つかっていないが、おそらく規約にも記されていたと思われる彼らの信条は『上社会会報』創刊号に散見できる。森寅雄は先ほど引用した「会報発刊に際して」の後半で次のように綴っている。

上社会は自由な思想と束縛せられざる傾向をもつて会員は思ひ思ひの研究を続ける。プロレタリア芸術の為に気を吐く永田一脩君及大月源二君の異色ある新人もあり、舞台芸術に理解ある新人の染木君等もあつて、必ずしも上社会がアカデミズムに支配せられて居ない事を物語つて居る<sup>11</sup>。

創刊号にはもう一人、大館健三も寄稿している。

上社会の一つの特色は会員が、それぞれ思ひ思ひの事をやつて居て、しかも一同が実に緊密に結束して居ることである。上社会員で外へ出品してある人にして帝展もあれば、二科も、春陽会もあるし、大月、永田両君の如きプロ作家もある。だから二三枚見れば、あとは大同小異だといふ風な展覧会上社会展とはそこが違ふのである<sup>12</sup>。

二人が共に用いた「思い思い」という言葉が印象的である。森寅雄は「自由な思想」「束縛せられざる傾向」によって「思い思い」という言葉を強調しているし、大館健三は「思い思い」である会員たちが一方で「実に緊密に結束して居る」ことを誇らしげに書いている。

個人の思想を尊重しながら上社会という場では結束するという関係性もまた、上社会規約に謳われていたのではないだろうか。というより、彼ららしい展覧会や同窓会の在り方を皆で吟味し集約されたのが上社会規約となったと考えるのが自然だろう。

実をいうと、上社会が結成のための規約をまとめる行程やその内容などは、第二次世界大戦後の日本国憲法が施行された日本に生きる現代人にとっては、小学校で身につけるようなことであり不自然さを感じない。しかし、彼らが結成されたのは、大日本帝国憲法施行下の大正末期である。となると、この規約の作成には現代よりもはるかに強い意志を必要とした作業がともなったのではないか。

そうした在り方を上社会が選択した背景には、彼らが青春時代を過ごした大正期に顕著にあらわれた民主主義に関する運動、いわゆる大正デモクラシーの影響もみてとれるだろう。大正デモクラシーのきっかけのひとつと言われるのが日露戦争の終結（1905年）であり、1989年から1904年生まれの上社会の会員にとっては、物心ついたときには労働運動や階級闘争などが日本各地で起きていた出来事であった。会員が旧制中学の学生だった頃には、地域によっては早熟な同級生がそうした労働運動に参加していたかもしれない年代である。

例えば当時もよく知られていた論文のひとつに、民本主義を提唱した吉野作造が1916年に『中央公論』で発表した「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」がある。この中には「政権運用の終局の決定を一般民衆の意嚮に置くべき（政策の最終的な決定を、人民の考え、意向に基づくべき）」<sup>13</sup>という一文がある。同じく一般選挙の必要性を説くくんだりでも「人民に与うるに各種の意見を公平に聴取するの機会を持つてするの必要なることである。換言すれば思想の自由、言論の自由を尊重して、人民をして妨げなく各種の意見に接し、その間に自由の選択、自由の判断を為すことを得せしむることが必要である。（人民に対して、さまざまな意見を公平に聞く機会を与えなければならない。言い換えると思想の自由、言論の自由を尊重して、人民がさえぎられることなくさまざまな意見に触れられるようにし、その中から人民みずからが自由に選択し、自由に判断することが必要だ。）」<sup>14</sup>とあり、そもそも本論考は憲法に基づいておこなう政治の重要性を説くところから始まっている。吉野作造の代表作と言われるこの論文の内容を深く知らなくても、吉野が発表してから10年、上社会が結成される頃までの間に、立憲主義や民主主義（吉野は民本主義と称した）の主だった思想が若者にも行き渡っていたと考えれば、上社会は個人個人の自由を尊重したい20歳代の会員たちが意見を出し合い、最も活動しやすい内容の規約を作り、それに基づいて結束した、大正デモクラシーの理想形を彼らなりに体現した団体だったともいえるだろう。

余談になるが、わが青春の上社会展を準備している最終段階で気がついたことがある。上社会の関係性が、童謡詩人・金子みすゞの有名な詩にそっくり詠われているのだ。

私が両手をひろげても、  
お空はちつとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のやうに、  
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のやうに  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがつて、みんないい。

『私と小鳥と鈴と』<sup>16</sup>

作者の金子みすゞは、1903年生まれ、上社会会員と同世代であった。活動場所も立場も性別も異なるが、それぞれの感性でこの時代のにおいを嗅ぎ取り表現していたのかと思うと興味深い。

ところで、『上社会会報』創刊号で森寅雄と大館健三が特に名前を挙げたのは、大月源二と永田一脩であった。この二人は、関東大震災後に活発化したプロレタリア美術運動に、東京美術学校の現役学生では初めて参加し、卒業後も活動を続けている。プロレタリア運動は治安維持法の改正によって厳しく弾圧され、永田と大月も『上社会会報』創刊号が発行された1930年にはすでに繰り返し検束や拘置されていたのだが、森寅雄と大館健三は、大月らの活動が「思い思い」な上社会の象徴であるかのように記している。

大月源二と永田一脩は上社会の展覧会には第1回展からしばらくは出品していない。だが少なくとも大月は、最後に検挙され服役した刑務所を仮釈放となった1935年11月から5カ月後の、1936年の上社会第9回展に初めて出品し、以後毎年のように参加した。当時のものと思われる、上社会会場で撮影された集合写真には、頭に白い包帯らしきものを大きく巻いた大月も写っている(図2)。撮影した年が不明のため、わが青春の上社会展では紹介しなかった写真だが、これを見ると大月の包帯は服役中に負った大怪我かと憶測してしまう。

大月が上社会に戻ることができたのは、仲間の呼びかけもあっただろうが、会員たちのそれぞれの活動を認め、尊重しあうことを明記した規約が、ここでも十分に機能した



図2  
上社会展会場での集合写真(撮影年不明)  
前列右から大月源二、加山四郎、白井二郎、藤岡一、  
牛島憲之。後列右から狹野映彦、水上信雄、  
森寅雄、高橋弘二、染木照、中西利雄、島野重之、  
池田幸太郎。



と考えられる。

今回の論考で主要な資料として取り上げた『上社会会報』は、2号までしか見つかっていない。創刊号では上社会の存在を高らかに謳っているが、2号では上社会第3回展を開催するまでの会員の仕事ぶりなどを紹介する一方で、世話役の交代や、最後の頁には「早く上社会が活版の本を会報とする日の来らんこと祈ります」とも書かれている。創刊号は展覧会の会場で配布し、上社会を来場者からさらに外部に紹介してもらう広報目的も兼ねて制作したようだが、上社会展は回を追うごとにいずれかの美術雑誌が必ず紹介するほど注目されていた。そのため世話役が交代した段階で、会報づくりは3号以降は休刊となった可能性が高いだろう。

上社会は、会員たちが最初に自分たちのあるべき関係性を自ら丁寧に作った同窓会であり、美術団体であった。その存在意義は束縛ではなく、戻りたいと思える場所だったのである。

会員は戦争によって思わぬ人生の転換や終焉を余儀なくされながらも、それぞれの道を思い思いに歩み、日本各地、それどころか欧米にも活躍の場所を広げていった。それでも上社会においては皆同じ立ち位置であり、尊重しあう同志であった。

ただ、上社会では画家でい続けなければならない。晩年それはなかなか胆力のいる仕事でもあっただろう。1988年度展から会場となった日本画廊に残されている出品目録には、毎回〈遺作〉の文字が並ぶようになる。1994年の最終回の出品者は5人。皆90歳を過ぎても画家であった。

#### 【追記1】

「わが青春の上社会－昭和を生きた洋画家たち」は、当初は2020年7月に豊田市美術館から開催の予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大<sup>パンデミック</sup>によって、世界中の美術館、博物館の例にもれず会期は大幅に変更された。備忘録として、会期変更を判断した2020年4月から5月の動きを記しておきたい。

4月7日に神戸市立小磯記念美術館のある兵庫、4月16日には豊田市美術館のある愛知を含む全国に緊急事態宣言が発令され、さらに兵庫、愛知は同日、特定警戒都道府県にも指定された。ちょうど広報物や図録の制作のために作品の借用先から画像やカラーポジフィルムを預かり、集荷スケジュールも組み始めていた矢先のことである。豊田市美術館のポスター案の第1稿もデザイナーから届いていた。

だが、緊急事態宣言によって全国の博物館施設は臨時休館を余儀なくされた。県庁所在地にある神戸市立小磯記念美術館や本展事務局の中日新聞は、豊田市より危機意識が高く、早くに交代勤務となった。在宅業務のための整備が不十分なまま在宅勤務を導入した機関も多かった時期で、関係各所への連絡も担当者が不在だとメールのやりとりでさえ時間がかかるようになった。また全国の美術館では展覧会の中止、延

期等が相次いだことで年間、もしくは数年先までの展示スケジュールが急遽見直され、その結果、すでに出品の承諾を書類で取り交わしていても、借用が叶わなくなった作品も出てきたのである。

こうして展覧会前の最終段階の作業のひとつひとつにブレーキがかかる事態になったことから、4月半ばには準備を一旦中断して、豊田市美術館での7月開催を見送る決断をした。状況改善後の会期については、神戸、豊田両館の事情を鑑みながら休館中に、いくつかのスケジュール案を踏まえて協議を進めた。5月19日に両館とも再開してからは、感染の再拡大と、それにとまなう再休館の可能性を常に不安視しながらも、新たな会期を2020年度内に設定することに決めた。正確にいうと、神戸市立小磯記念美術館の会期は変更せず、豊田市美術館の会期を翌年1月に移動させたのである。

作品の借用先には展覧会の延期の連絡と、2回目の借用依頼を立て続けに行うこととなり、借用手続きだけみても通常の2倍以上の手間がかかっている。加えて豊田市美術館では、当初から2021年1月からの開催が決まっていた別の展覧会「デザイン・あ in 愛知」との2本同時の開催となり、館内の人流の調整などのため職員、監視員が感染防止対策に駆け回った。

それでも全国で美術展の中断や中止が相次いでいた2020年度に、わが青春の上社会展は奇跡的に無事に終了することができた<sup>16</sup>。神戸市立小磯記念美術館、豊田市美術館とも、所蔵者、協力者や両館の職員、さらにデザイナーや設営、輸送等のあらゆる関係業者からも、いつも以上の理解と協力を得たから成せたことと心から感謝している。

## 【追記2】

わが青春の上社会展が終了してまもない2021年4月に、中川規矩麿の遺族から連絡を受けた。中川は情報が乏しく、作品の所在はおるか、生没年も名前の読みも不明、本人はもちろん遺族の消息も不明であった人物である。この機会に、提供された情報をもとに、わが青春の上社会展図録の同作家解説を次のように改正したい。

### ●中川規矩麿（なかがわ・きくまる） 1901-1945（明治34-昭和20）

徳島県板野郡鳴門村（現鳴門市）に生まれる。東京美術学校西洋画科へ入学。藤岡一の思い出によれば、受験にいたる数年を本郷洋画研究所で過ごし、1922（大正11）年の受験時には小磯良平とイーゼルを並べてミケランジェロの石膏像を木炭デッサンした。教室は和田教室。東京美術学校卒業時には《M老人と小鳥》を提出。《自画像》では背広にネクタイを結んだ、面長の生真面目そうな中川の姿が残されている。卒業後は鳴門に帰郷し、徳島県立撫養中学校（現徳島県立鳴門高等学校）で教鞭を執った。遺族によると撫養中学校の校章は中川がデザインしたという（同デザインは現在も鳴門高校の校章に引き継がれている）。

日中戦争に召集され、1939（昭和14）年春には大陸で手榴弾を被弾するが、全快し

て帰郷したと藤岡は回想している。1943年、第3回独立美術展に入選後、再召集され、1945年、ビルマのイエレカシで没。享年44<sup>17</sup>。

このほか、石井清夫についても2021年2月に、館林市史編さんセンターと元群馬県立館林美術館館長の染谷滋氏の調査により、遺族の消息がわかったという連絡ももらった。遺族が戦後も手放さなかった数々の作品や資料から新たに発見された事実は、『館林市史 特別編第7巻 館林の文化と芸術』（2021年12月刊）で、染谷氏によって丁寧にまとめられている。

石井清夫の遺族のもとには、わが青春の上社会展の準備中は複製しか見つからなかったガリ版刷りの『上社会会報』創刊号も残されており、2号で大館健三が報告していた、日高政榮がミシンで綴じた製本のあと<sup>18</sup>も初めて確認された。（図3）



図3  
『上社会会報』創刊号表紙  
右側にミシンによる綴じ目がある

#### 註

<sup>1</sup> 会員には全国的に著名な画家ばかりではなく、地方で教育や美術の普及活動に携わった者も多いため、わが青春の上社会展の調査開始時点では半数が生没年不明だった。

<sup>2</sup> わが青春の上社会展では生年不明は4人だったが、終了後に1人判明したため、2022年1月現在は3人である。

<sup>3</sup> 小堀二郎「上社会56年の感慨」『繪』233号(1983年7月)。

<sup>4</sup> 荻野暎彦「上社会発足から」『繪』148号(1976年6月号)。

<sup>5</sup> 年譜『牛島憲之展 府中市美術館コレクション』図録参照。牛島憲之の他の年譜でも基本事項のように記載されている。

<sup>6</sup> 政所里子「伊藤和也の思い出(三)」『断絶』94号(2003年)参照。政所里子は杉浦俊雄の娘であり、この随筆のなかで若い頃の父の様子を綴っている。

<sup>7</sup> 大館(旧姓滝沢)健三「第三回展の記」『上社会会報』2号(1930年)（『わが青春の上社会—昭和をいきた洋画家たち』展図録(2020年)に再録)参照。以下、『上社会会報』創刊号及び2号からの参照資料はいずれも同展図録44-47頁に再録。

<sup>8</sup> 岡田三郎助、和田英作、藤島武二、長原孝太郎、小林萬吾。いずれも西洋画科教授。

<sup>9</sup> 森寅雄「会報発刊に際して」『上社会会報』創刊号(1930年)。

<sup>10</sup> 前掲(註4)。

<sup>11</sup> 前掲(註9)。

<sup>12</sup> 大木琴夫「上社会第三回展に際して」『上社会会報』創刊号(1930年)。大木琴夫は大館(旧姓滝沢)健三のペンネーム。

<sup>13</sup> 吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」『吉野作造選集 第2巻』(岩波書店、1995年)43頁(初出『中央公論』1916年1月号)。なお、山田博雄訳「憲政の本義、その有終の美」(光文社、2019年)を参照した。

<sup>14</sup> 前掲書(註13)、69頁。

<sup>15</sup> 金子みすゞ『新装版 金子みすゞ全集・III』(JULA出版局、1984年)、145頁。

<sup>16</sup> 豊田市美術館での会期中、2021年1月14日から2月28日まで愛知県に緊急事態宣言が発出された。1月14日時点での同宣言の対象地域は愛知を含み1都2府8県。豊田市美術館では臨時休館の措置は取らなかったものの、全国的に県境をまたぐ移動の自粛が要請された。

<sup>17</sup> 「わが青春の上社会」展図録で当館学芸員・西崎紀衣が執筆した作家解説に筆者が補足修正した。

<sup>18</sup> 前掲(註7)参照。「…会報第一号も石井君の努力に依り印刷が出来上って島野君のアトリエへ届けられたので、丁度来合せた連中で製本をやったのです。矢田君が紙を揃へる、日高君がミシンでとどる、林君が本を積み上げるといふ様な分業で冗談を言ひ合ひ乍らも一生懸命に仕事をしました。…」

上社会 会員一覧 五十音順 ※ただし留学生は姓を音読みにした場合の順番

	会員名	よみがな	生地	生没年
1	青山襄	あおやまじょう	島根県	1901-2009
2	池田幸太郎	いけだ こうたろう	和歌山県	1902-1984
3	石井清夫	いしい きよお	栃木県	1904-1944
4	犬丸順衛	いぬまる じゅんえい	佐賀県	1903-1939
5	猪熊弦一郎	いのくま げんいちろう	香川県	1902-1993
6	植松治郎	うえまつ じろう	兵庫県	1902-1937
7	牛島憲之	うしじま のりゆき	熊本県	1900-1997
8	大館健三	おおだて けんぞう	東京都	1902-1977
9	大月源二	おおつき げんじ	北海道	1904-1971
10	岡田謙三	おかだ けんぞう	神奈川県	1902-1982
11	荻須高德	おぎす たかのり	愛知県	1901-1986
12	荻野暎彦	おぎの てるひこ	東京都	1902-2001
13	加山四郎	かやま しろう	神奈川県	1900-1972
14	顔水龍	Yen Shui Long/イェン・シュエイロン	台湾	1903-1997
15	小磯良平	こいそりょうへい	兵庫県	1903-1988
16	高野三三男	こうのみさお	東京都	1900-1979
17	小堀四郎	こほり しろう	愛知県	1902-1998
18	近藤啓二	こんどう けいじ	徳島県	1903-1998
19	島野重之	しまの しげゆき	滋賀県	1902-1966
20	白井次郎	しらい じろう	兵庫県	1902-1942
21	杉浦俊雄	すぎうら としお	愛知県	1900-1988
22	染木照	そめぎ あつし	東京都	1900-1988
23	高島功	たかしま いさお	福岡県	1903-1986
24	高橋弘二	たかはし こうじ	東京都	1903-1974/75
25	滝波恒雄	たきなみ つねお	北海道	1902-1945
26	太刀川英次郎	たちかわ えいじろう		?-1977?78?
27	田村義夫	たむら よしお		?-1976~88頃
28	譚連登	Tan Liandeng/タン・リエンダン	中国	1901-?
29	張秋海	Jang Chiou Hai/チャン・チョウハイ	台湾	1899-1988?
30	都相凰	To Sang Bong/ト・サンボン	朝鮮	1902-1977
31	中川規矩麿	なかがわ きくまる	徳島県	1901-1945
32	永田一脩	ながた かずなが	福岡県	1903-1988
33	中西利雄	なかにし としお	東京都	1900-1948
34	橋口康雄	はしぐち やすお	鹿児島県	1903-1973
35	菱田武夫	ひしだ たけお	愛媛県	1902-1994
36	日高政榮	ひだか まさひで		?-?
37	深井修次	ふかい しゅうじ	埼玉県	1902-1997
38	藤岡一	ふじおか はじめ	福岡県	1899-1974
39	水上信雄	みなかみ のぶお	岐阜県	1904-1994
40	森達雄	もり たつお	宮城県	1900-1988
41	森寅雄	もり とらお	東京都	1902-1976
42	矢田清四郎	やた せいしろう	島根県	1900-1977
43	山口長男	やまぐち たけお	朝鮮	1902-1983
44	林丙東	Lin Bingdong/リン・ピンドン	中国	1904-1994以後